

巻 頭 言

「知財翻訳」と 「インテリジェンスカ」

NIPTA 理事
日本アイアール知的財産活用研究所
矢間 伸次



「英訳A」と人間どう違う」朝日新聞 夕刊
2023/05/12

「対話型人工知能（Chat GPT）と人間との違いを、英訳を通じて学ぶと言う授業が立命館大学で始まった。（中略）一つが「自力」、もう一つが旧来のサービスを使った「機械翻訳」、そして「チャットGPT」を使った英作文。」（原文引用）

この記事の中で、英語の論文を書く時に楽をした、と思った大学院生が開発したツールが紹介されていた。

「もともと論文を日本語で書き、英訳するために機械翻訳を活用していたという。示された英文の意味やニュアンスが正しいのか再度機械翻訳で和訳し、意図した日本語になっているか確認する作業を繰り返していた。この手間を省こうと同じ画面で翻訳と逆翻訳ができるツールを開発。」（原文引用）

以前、これと似た内容を「知的財産翻訳ジャーナル 第170号 2019年8月号」へ寄稿したことがある。「友人の娘さんは、アメリカ人と結婚しており、アメリカで暮らしている。娘さん家族との近況報告はメールを使って英語で、やり取りしている。彼の説明によると、まず自分の日本語を翻訳ソフト（日⇒英）で英語へ翻訳し、その英文をコピーして、英⇒日の翻訳ソフトにかけて日本語へ翻訳する。そうすると変な日本語が出てくるので、日本語を修正して再度、日⇒英の翻訳ソフトを使う。このように2つの google 翻訳ソフトを行ったり来たりしてやっ

ている。このやり方で翻訳した英文を英語の達人に見せたことがある。家族へ出す英文としては「固すぎる」と言われた。しかし一番大事なことは、相手に伝わることであるから、と合格を貰った”。

英語教育 チャット GPT で変わる？朝日新聞 朝刊 2023/06/11

「誰もが英語“使える” ツール登場 専門家に聞く
—英語を学ばなくても、いい時代が来たのか（中略）、
—中学や高校の英語教育にも影響があるのか（中略）、
—変化は、どの程度先の未来か（中略）
—英語教師は必要なくなるのか、米国の学者が書いた論文では、AIの影響を受ける可能性の高い職業の2位に英語教師が入った。3位は、外国語教師。10位までの八つ、を教職が占めた。（中略）
—英語を学ぶこと自体も揺らぐのか、英語がグローバルスタンダードであることは変わらない、また、ニュアンスや文化的背景を踏まえた高度な英語を駆使しなければならない翻訳家、通訳と言った職業が無くなるとは思わない。チャットGPTは道具。平均的なコミュニケーションは代替できても、それ以上の知的作業は人間の力が必要だ。」（原文引用）

翻訳者は、グローバル社会で起こる変化に対応できる能力、つまり「インテリジェンスカ」を身につけていると思う。何故なら翻訳者は、数多くの翻訳を通じて広い世界が見えている。例えば、物の観方や考え方、つまり文化が言語を生み、言語が文化を

育てること。グローバル世界での共通言語は英語であること。英語は自分の主張を通す言語であること。そして世界へ「物・事・考え」を誤解無く伝える「やさしい日本語」が必要であること。

世界の状況は刻々と変わっていくが、我々日本人は「インテリジェンス力」の力が弱まっているのではなかろうか。「ムラ」という共同体（会社）で生きてきた我々日本人は、その眼が「内」に向いてしまい、中々「外」へ向かない。

「インテリジェンス力」とは、世界から情報を収集する能力と、それらの情報をどの観点から眺めるかの分析手法、そして状況と分析結果の表現力（報告力）ということになる。つまり、インテリジェンスの基本は、全体を俯瞰して眺めることができる能力と言える。我々日本人は、何かを作り上げる時に、部分から作り始めるのが一般的であり、アーキテクチャーと呼ばれる全体の構造設計を苦手とすることにも現れている。例えば、マイクロプロセサのアーキテクチャーは描けないが、その部分である半導体メモリーの改良はお手のもの、というようなところにも現れている。

「インテリジェンス力」を身に付けるには、世界と繋がるツール（英語）を使い熟す英語力が不可欠である。余談だが、インテリジェンスが不足していると、優れた発明をしても、その発明が全体の中で何処に位置しているのかを明らかにしないまま、突然発明そのものの説明から始める、なんてことにも現れてくる。ともあれ、自分達の文化とは大きく異なる文化の下で生きてきた世界の人々へ、こちらの考えを述べ、何とか合意を得ようとするならば、論理的に筋道立てて明快に表現するしかない。

困みに「インテリジェンス力」が高い人は、問題がここにあり、それを解決するためには、このようにしなければならない、そのためにはこのような努力が必要である等、説得力を持つ。物事を論理的に突き詰めれば、物事の本質が見えるようになる。物事を多面的に捉えられるようになる。つまり問題（課題）が見つかりやすくなり、課題解決の道筋が早く見つかるようになる。受身での仕事が多くなり、

自分のアタマで考える習慣が身に付き、クリエイティブな仕事をする。といった共通点がある。

AI翻訳が「知財翻訳者」の仕事奪うという声も聞こえるが「インテリジェンス力」を発揮すれば、「知財コンサルティング」として活躍できる「場」は増える。IP（知財）戦争とは、詰まるところ言語の戦いである。世界で通用する、戦える強い特許明細書（仕様書）を作らなければならない。特許明細書は、ご承知のように発明技術の説明と、その権利を主張する文書である。様々な文書の中でも特異な存在だと思う。知財文書の基本は、読んで納得ができる分かり易い文書構成と文章表現力が求められる。曖昧を好む我々日本人にとって不得意な分野である。だからこそ需要は有る。「知財コンサルティング」の仕事は、これだけではない。昨今、知財業界で取り上げられている「IP ランドスケープ (*)」への支援が必要である。「IP ランドスケープ」を担える人材が圧倒的に少ないのが日本の現状である。だからと言って外国コンサルタント会社へ依頼しても、期待するレポートが届く保証は無く、高額の請求書はキチンと届く。このままでは「知財立国日本」の実現は難しい。

日本知財業界は、「知財翻訳者」が持つ資源（資質）に着目して彼らの潜在能力を引き出す役目がある。その目的は、知財の仕事を目指している若い人や現役の知財マンから目標とされる、先駆者（スター知財マン）の発掘と活用である。それが、日本の知財力を支えていく知財人材の拡大へ繋がる。AI翻訳で日本人の英語苦手は解消され、英語学習の壁は低くなる。知財翻訳もAI翻訳の支援が受けられる。しかし特許明細書は、デジタル技術とアナログ技術の共存で仕上げることになる。特許明細書の作成者と翻訳者に求められているのはインテリジェンス力が高い「デジ・アナ人間」である。

知財翻訳検定試験は、大きな意味がある。合格者は「グローバル知財」で活躍できる「インテリジェンス力」の証にもなる。知財を業とする人達が検定試験に挑戦することで、知財業界全体の「インテリジェンス力」への意識が高まりアップする。

(*)「知的財産翻訳ジャーナル 第206号 2022年8月号」 「IP ランドスケープの推進」で期待できる「特許翻訳者」